夢の中の訪問者

水上の魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の中の訪問者

【Ｎコード】
Ｎ８６７０Ｃ

【作者名】
水上の魚

【あらすじ】
あることをきっかけに、人の死にばかり直面するようになった主人公の、奇妙な話し。

プロローグ（前書き）

※この作品にはグロテスクな表現が含まれております。心臓の弱い方、及び、そのような表現を嫌う方は注意して下さい。

プロローグ

赤信号を無視したトラックが、鈍い音と共に鮮やかな赤を道路に描いた。
目の前で女子高生がひかれたのだ。そう、私の目の前で。いつもの事だ。こんな風に人の死ぬ場面ばかりに遭遇しては、後で、警察官に聴取される。
「また、君か。で、今回の事件もみてたんだろ。」
やっぱりか、と言わんばかりの口調で、警察官に問われる。
「ええ。みてましたよ、また。それも、目の前で。」
はっきり言えば異常だ。こんなことが、多ければ月に一度、振りかかるもんだから、地元の警察にも疑われる始末。
仕方ないと言えば、そうなのかもしれない。今回は自動車事故で、運転手が罪にとわれる事は明確であるからいいものの、この前の連続通り魔事件では、えらく長い期間、警察に通わされたものだ。しかも、こんな風にして、死に直面した日には必ず夢を見る。今晩も見ることになるだろう、被害者の夢を。

1　女子高生の夢

「なんで私なの。どうして……。…何でもないはずの帰り道、いつも通りの通学路のはずだった。それなのに。」

ふと時計に目をやる。

「なんだ、まだ三十分しか寝てないじゃないか。」

いつもの事だから、気にしないとは言え、やはり、夢の中で今日死んだはずの声が聴こえるのは恐ろしい。

過去に、わざと睡眠をずらして取ることも試したが、どうやら彼、彼女らの気が済むまでは、ずっと夢に現れては、思いの限りを語り続けるらしいのだ。

「気づいてたわ。ぶつかられる瞬間に、私、死ぬんだってこと。スローモーションになって、はっきりと『死』が近づいて来るの。あなたにわかる？こんな気持ち。

あの時、トラックが信号無視しなければ死なずに済んだのに。あんなにぐちゃぐちゃになった娘の姿を、家族が目にしたら、どう思うと思う。まだあの道には、血の跡が残ってるわ。私の友達は、その血痕の上を通って学校へ行くことになるのよ。血の跡が消えたって、卒業したって、ずっとあの道を目にするたびに、胸を痛めて、その度に悲しい気持ちになる。そんな人が何人居てると思う？死んだという事実が、残された人の中で生き続け、重くのしかかるの。それは、私を轢き殺した人間だって例外じゃないわ。きっとこの先、ハンドルを握る度、私と同じような高校生を見る度、罪悪感がわくはずよ。痛みを抱いて生きて行くことになるのよ。

死にたくはなかった…。ただ、憎いという気持ちは無いわ。でも、罪は償って欲しい。あの場に居たのはあなただけ。だから警察にはきちんと説明して欲しいの。あなたが見たことも、逃げていったあ

のトラックのことも。
もうすぐ学園祭だったの。時間をかけていろんな準備をしたわ。模擬店がしたいとか、劇がしたいとか、いろいろ話し合ったの。みんな、受験勉強そっちのけで、買出しに行ったり、衣装作ったり。音楽室貸切でミニライブをするグループとか、体育館のステージでブレイクダンスを披露するような人もいてる。すごく楽しみにしてたのに……行きたかったのに…。
…悔しい。まだ楽しいことなんて、何にも知らない。デートどころか、こんなことになるなら、好きな人にきちんと告白すればよかった。もっと自分に正直になって、好きですって伝えたかった。何も言えずに、何も伝えられずに、生きれなくて悔しい。もっといろいろ知りたかった。もっと遊びたかった。もっと楽しんだり、笑ったり。もっと勉強して、もっと夢を追いたかった。…後悔を残したまま逝きたくなかった。」

2　夢から覚めて…

警察へ行って、現場で起こった事を全て話してきた。勿論、こんなことが彼女の供養になるかなんて考えてはいないことだった。それでも、こうして少し、ボランティアでもした気になって心が軽くなるのだから、損した気にはならない。
しかし、彼女は知り得なかったのだろう。当日に、逃げた運転手がすでに検挙されていたことも、怖いものみたさに死体を見物に来た野次馬の数も、普段静かな町が、サイレンの音と共にざわめいていたことも。
そしてこれからも知ることは無いだろう。酒を飲んでいてブレーキが遅れたことも、一切の謝罪や反省を見せていないことも…。
「本当に世の中これでいいんだろうか。」
そんな言葉が頭に浮かぶ。
一年半程前までは、こんなこと考える余裕すらなかった。
死んだら死ぬだけ、それで終わり。
そんな風に思っていた。でも、アレをきっかけに、色んな人間が目の前で死に、殺される。話しをするどころか、名前すら知らない他人だがそんな人もそれぞれが、それぞれの想いで生活し、目標を持ち、様々な人と関わって人生を歩んでいる。たまたま自分とは無関係でも、死んだらそれで終わりなんてことは決して無い。
きっと、今ではそんな風に考えるから、こんな言葉が浮かぶのだろう。と、部屋で一人、自問自答して今日一日を振り返っていた。
眠りに就く前に、枕元に置いてある一月前の新聞紙の1面を読み返すことにした。ニュースやワイドショーでも取り上げられた、隣町で起こった連続通り魔事件の記事だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8670c/

夢の中の訪問者

2010年10月20日19時37分発行